

## 40 宇治田雲庵『医学弁害』(1680)の「病家類」にみる 医の実践対象としての病家

平尾真智子

健康科学大学

宇治田雲庵(1618-1686)は江戸前期の医者で紀州和歌山藩医。名は友春で、和歌山の籬屋に生まれ、北桶屋町に居住。腕を折ったため家業を継ぐことができず、遊学して医術を学んだ。特定の流派には属さず書を多く読んだ。延宝年間(1673-1681)に藩主徳川光貞の病気を治し、名医の評判を得た。著書に『医学弁害』がある。この医論書の中に「病家」に関する記述がある。本研究ではこの『医学弁害』がわが国の医学書のなかでは早期に「病家」を視野に取り入れた構成をしていることから、この「病家類」の内容を分析し、医家として対象である病家をどのように捉えていたのか明らかにする。

研究資料はオリエンタリゼーション臨床文献研究所監『臨床漢方診断学叢書』(29 基礎理論5)、オリエンタ出版社、1995、276-301頁に所収されている、『医学弁害』の巻第9「病家類」とした。また京大富士川文庫所蔵の『医学弁害』を参考にした。漢文の読み下しには会員の三鬼丈知氏にご協力いただいた。

『医学弁害』は序、目録、本論12巻で構成されている。延宝8年自序、翌9年刊。外題は『医学弁解』で、漢文体の書である。序文で雲庵は『黄帝内経』や『難経』などの基本医学経典を名医といわれる李東垣や朱丹溪が誤読し、そのまま治療に用い弊害が生じた。先人の錯誤を世に知らせるために本書を著したと目的を記している。巻1は経書類、巻2は陰陽類、巻3は五行類、巻4は臟腑類、巻5は診脈類、巻6は撰生類、巻7は気味類、巻8は疾病類、巻9は病家類、巻10は医家類、巻11は治法類、巻12は薬剤類となっている。『黄帝内経』の医論をベースに、明の医書類を参考にし、各巻篇を分けて詳細に論を展開している書である。後年、荻生徂徠(1666-1728)による批判が『徂徠先生医言』(1767)と題して出版されている。

巻9「病家類」の小論は16項目で、それらは順に、総論、択医者有利有害論、用医試法論、医必可貴論、医三世不服某薬論、不可用時医名医論、不可輕易服薬論、不可輕易致灸論、軽身重財論、貴遠賤近論、致惑於仏論、致惑於鬼神論、致惑於巫覡論、致惑於夢論、鐘馗論、神鬪論、となっている。総論では、病家が医を求めるには学ではなく名・師・傍人の評議などによる、また医を信じないで医を更えることが多い、自然治癒を信じ重くなってから医薬を求める、医の問いに嘘を言う、医の禁忌に従わずその医を更える、医の更否宜しきを失い病家の大患となる、医は死生を司るので軽視してはならない、父子の如く信じあえば病は癒ゆる、医は書だけでなく経験の功を積むべきである、病によりて薬を用るのは敵によりて兵を用いるのと同じである、病は軽きに治すべし、医は病を四診で知る、病者は心身が疲れているので病家親族は慎みなさい、といった内容が記されている。15の各論では医の求め方と薬・灸の用い方の注意、病者の心の持ち方と仏・鬼神・巫覡・夢・鐘馗・神鬪などについての注意となっている。

宇治田は医者向けに自分の信じる医学の理論と実践について漢文で記し、理論として経書・陰陽・五行・臟腑・診脈・撰生・気味・疾病を、実践として、病家・医家・治法・薬剤を論じた。このうち、「病家」は実践の部の最初に取り上げている。このような論の構成は、曲直瀬道三の『啓迪集』(1571、全8巻)にはみられない。「病家」に対する宇治田の注目は、後世の『病家要論』(1695)、『病家心得草』(1780)、『病家教訓草』(1781)などの著作に継続され、19世紀に入り大きく『病家須知』(全8巻)(1832)に結実していく。宇治田の医学論への荻生徂徠による批判は主に理論編の経書類、陰陽類、五行類にあり、実践編についての言及はない。宇治田の医学論は医学を理論と実践に分けながらも総合的にとらえ、「病家」を実践の最初の1部門(類)として独立させ、前面に提示したことに価値があると考えられる。